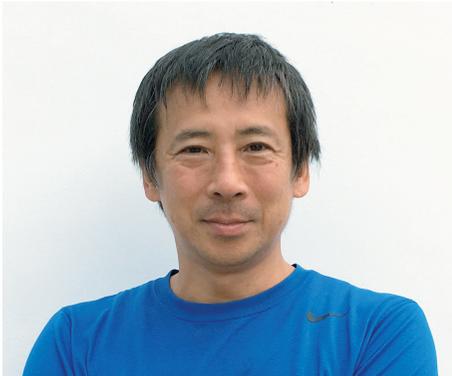


この人に聞く

手塚
貴晴氏



プロフィール 1964年東京都生まれ。建築家／手塚建築研究所共同主宰／東京都市大学大学院総合理工学研究科教授。1987年武蔵工業大学（現東京都市大学）卒業。1990年ペンシルバニア大学大学院修了後、1994年までリチャード・ロジャース・パートナーシップ・ロンドン勤務。1994年に手塚由比氏と手塚建築企画（現手塚建築研究所）を共同設立。2003～2009年武蔵工業大学准教授を経て、2009年より現職。OECD（経済開発協力機構）とUNESCOにより世界で最も優れた学校に選ばれた「ふじようちえん」を始め、子供のための空間設計を多く手がける。国内では日本建築学会賞、グッドデザイン金賞、子供環境学会賞など受賞され、現在は、建築設計活動に軸足を置きつつ、OECDより依頼を受け国内外各地で子供環境に関する講演会も行う。

東京都市大学教授 手塚貴晴氏に、「百年後」をテーマに、これからの日本の建築がどうあるべきかについて伺った。（令和6年11月）

■建築が有する真の価値とは

昨今、たくさん面白い建築が出てきていますが、建築の学生もみんなネットで探し回って、これがよい建築だと勘違いしています。以前のように、一つの指標として建築の専門誌などによって建築の価値が示されることも少なくなり、目を引くもの、一見して面白いものが評価される時代です。そうなると、学生も何を評価してよいか分からない。偉大な建築家の作品もそうでないものも全部横並びにされて、それらから取捨選択していくフィルタがなくなってしまっていて、結局、目につくものが選ばれて、今のモードに乗っかっているものが評価される状況になっています。

これは建築の本質と全然違います。建築後、10年、20年、50年経過して変わらず評価され続けることで、本当の建築の価値が示されるのだと思います。建築家ピーター・クックも、10年間、建物が価値を失わないのは、その国ですば

らしいこと、20年なら世界できちんと意味のあることだと話していました。建築はファッションではなく、100年、200年と生き続けるものですから、このような視点がとても大切だと思います。

どうい建築が残るかという、現在、SDGsのもとリサイクルが推進される一方で、世界的に歴史的建築が何百年もリサイクルされることなく愛され続け、そのまま残っています。また、物理的に丈夫でも、人々に必要とされない建築は壊される運命にあります。みんなが大切にしている、みんなに愛されている。これがやはり建築にとって大事なことだと思うのです。私としても、自分が住みたい場所、自分が居たい町をつくるという態度で、やはり意味のあるものをつくりたいと思っています。

そして、これから建築を学ぶ人たちに、「何のために建築をつくるか」を見失わないことが大切だと伝えていきたいと思っています。そうしてつくられた建物はずっと生き残っていきます。建築家は孤高の存在ではなく、人の生活が理解できることが大事です。つまり、人の幸せが分らないと、人に幸せを提供できないのです。

■愛される建築と建築が持つメッセージの重要性

20年以上も前に「屋根の家」というものをつくりまして、これは児童書や美術の教科書に載っていることで若い世代の人たちにかなり知られています。当時、これを見た「ふじようちえん」の園長先生の「屋根の上に子どもを乗せたい」という意向から幼稚園の設計が始まりました。子どもたちが自由に走り回れるよう丸い輪の屋根にして、既存の木を伐採せず、木と建築が融和するデザインにしています。屋根の上だけで2,500～3,000人乗れるくらいの大きさです。その他に園長先生の教育理念や学術的見地からの子どもたちの環境づくりのアイデアがふんだんに盛り込まれ、当時の様々な規準とすり合わせていながら、行き止まりのない動的な空間を創出して、子どもたちの健康や成長に寄与する建築を実現しました。これが新しい幼稚園像を形づくり、後に世界的な評価を受けることになりました。特に、OECD／CELE 学校施設好事例集の最優秀賞に選ばれ、日本の幼稚園設計基準にも影響を与えるほどの成果を挙げました。今でも、ものすごく多くの見学者が国内外から訪れています。何よりも子どもたちが楽しそうに使ってくれていることに、愛され、使われ続ける建築の重要性を感じるのです。

そして、建築というのは、単なる物としての価値だけではなく、メッセージがとても大切です。東日本大震災後、

仮設幼稚園の設計を依頼された際、仮設なのに新築並みのコストがかかることに疑問を感じ、被災地のお寺の参道の並木を使用して「あさひ幼稚園」をつくりました。この木は1611年の津波後に植えられたもので、震災時の津波で枯れてしまったのです。これを使った幼稚園は、震災を免れたお寺の一部ですから、二度と津波の来ない高さにあります。次の地震が来たらここに避難すれば助かるよという、未来の災害に備えるシンボルとして町の人々に深く根付いています。

また、沖縄の「空の森クリニック」では、不妊治療施設に森を再生するプロジェクトを展開しました。中心部の高度医療施設のみ高度なクリーンルームにして、それ以外は外界との境界をなくすような構造にしています。これは、人間の免疫システムの正常化によって体内のバクテリアのバランスを整えた環境において不妊治療するという理論に基づいたものです。ここは日本トップの着床率を誇り、世界中から治療に来ます。伝統的な木造建築の手法を活かし、長寿命かつ文化遺産となることを目指しています。

ほかにも、三条市で冬の高齢者の孤立を防ぐための集会所「まちなか交流広場 ステージえんがわ」や、渋谷の東急プラザ本店「渋谷フクラス」、新島学園の「新島の森-新島学園短期大学講堂」、「富岡商工会議所会館」など、多様なプロジェクトを通じて、それぞれの希望に応じた建築を提案しています。大切なのは、その地域とのつながりで、人々の絆を深める「メッセージ」を建築に表現しています。

そして、今取り組んでいるのがインドのヒマラヤの奥地での学校のプロジェクト「Jhamtse Gatsal」です。ここは貧困が深刻化し、5歳までに子どもの半数が命を落とす過酷な環境です。そうした中で、捨て子として僧院に育てられたお坊さんが、自ら孤児院を設立しました。彼はダライ・ラマの代理としての経歴を持ち、現在125人の子どもたちと一緒に暮らしながら、教育活動をしています。ただ知識を身につけるだけでなく、互いにシェアすることで知恵にしようを教育理念に掲げていて、子どもたちが主体的に学び、シェアすることで深い理解を促すことを実践しています。この教育モデルは、州全体でトップの学校に成長し、受験競争の厳しいインドで驚異的な大学進学率を上げています。しかも、誰も辛そうに勉強していない。これは学ぶべきだと思いました。予算ゼロスタートでも引き受けたのはこういふことに感銘を受けたからでした。

この学校の設計においては、お釈迦様の最後の説法の構図をモチーフに「シューニア」というサンスクリット語で「ゼロ」を意味する概念を空間設計に採用しました。シュ

ーニアは、終わりも始まりもなく、すべてがつながりを持つという宗教的な概念を表しますから、この学校の教育理念にも通るので、教室としての理想の姿だろうということで決まりました。このプロジェクトは教育、建築、地域再生という複数の要素を同時に追求しながら、貧困や紛争といった根本的な課題にも立ち向かっています。設立者のお坊さんはこの教育を広めることで戦争を終わらせるという壮大な目標を掲げています。

■公共を含むこれからの日本の建築のあり方

建物をつくる上で、最も大事なことは「誰のためにつくるか、何のためにつくるか」であり、その意味づけがしっかりされているものはきちんと生き残るのです。古くは法隆寺から始まり、現代建築では代々木体育館といった、日本の歴史の中で生き残っている建物は、きちんと目的と建物の存在が合っているのだと思います。ただ、それを見つけるのはとても難しいけれど、これは公共建築においてもとても大切なことだと思います。もちろんいろんな基準をクリアするなど必要なことはありますが、何より大切なことは、それが市にとって、もしくは町にとって、都市にとってどれだけ大切なことなのかということです。

「Architecture is not thing but event」(建築というのは物でなく、出来事である)であり、結局、建築というのは道具ですから、そのときに、何のためにつくるかを一生懸命、行政の方も考えていただけると、100年、200年残ることができるのではないかと考えています。

何を残すかということには、とても難しい問題があります。歴史的建造物に関しては、私は残すのがとても大切だと思っていますが、中の機能は自由に使わせるべきです。保存することで、冷暖房設備すら導入できない建物があるように、過度な保存方針では建物は死んでしまいます。また、近年では保存に値しない建物でも残すのがいいという風潮があります。新築並みのコストをかけて大規模な行政の建物を保存することに意義があるとは思えません。

これから先、日本は、50年、100年のことを見据えたものをつくるべきです。ただ単に残すことに執着するのは、必ずしもよいことではなく、やはり更新もしていかなければいけないのです。日本はリサイクル、リユースに過剰に振れてしまったのだと思います。一方で、ヨーロッパやアジアでは、必要な新しい建築を果敢につくり出しています。日本も、ただ古いものを守るのではなく、50年後、100年後を見据えた判断を行っていくべきなのです。